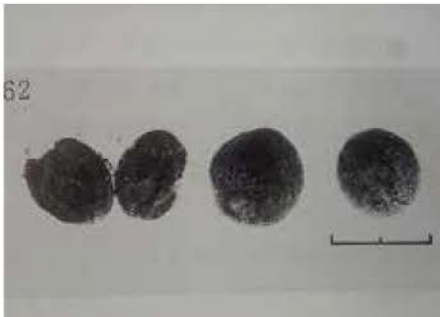




二本柳遺跡(十日市場)から発見された木棺(戦国時代)

木棺内部 遺灰や銅銭、土器などとともにボダイジュの数珠がみられる



木棺内から発見されたボダイジュの実

不動寺のボダイジュの実で作った数珠



ボダイジュの可憐な花



不動寺のボダイジュ

ふるさと
の 167
の 誇り



博レポート

馥郁たる香 不動寺のボダイジュ

ふくいく(※)

六月は、梅雨時とあって、はっきりしない日が続きます。このような時期に、小さく可憐な花を満開に咲かせてくれるのが、古市場の不動寺にあるボダイジュの木です。山門の脇に根をはるボダイジュの花の、その馥郁たる香りは周囲にひろがり、毎年参拝者や道行く人々に親しまれています。不動寺のボダイジュは、樹高約六・二メートル、幹回り(目通り)約一メートル。市指定の天然記念物になっていて、今もその樹勢は旺盛です。

お寺などに植えられていることが多いボダイジュ(菩提樹)は、中国原産のシナノキ科シナノキ属の落葉高木です。鎌倉時代の仏教史書『元亨釈書』によれば、日本へは十二世紀に臨済宗の開祖栄西によって中国(宋)の天目山より初めてもたらされ、まず筑前(福岡県)の香椎宮に植えられた後、京都の東大寺、建仁寺に移植され、その後全国へ分植されていったといわれています。ちなみに、ご存知の方も多いと思いますが、釈迦がその木の下で悟りを開いたという「菩提樹」は、クワ科イチジク属のインドボダイジュで、現在日本において広く認知されるボダイジュとは種がまったく異なります。一説には、中国では熱帯産のインドボダイジュの育成には適さないため、葉の形状が似たシナノキ科の本種をボダイジュとしたともいわれています。

ボダイジュの実は硬く、しばしば僧侶などがもつ数珠の材料としても用いられたようです。実際、市内でも十日市場の二本柳遺跡で発見された火葬骨(遺灰)を入れた木棺からは、副葬品としてボダイジュの実で作った数珠が発見されています。

この木棺は、戦国時代のものと考えられ、中には、数珠や火葬骨のほか、銅銭六枚(六道銭)、二枚重ねの土器の皿にのせられた稲穂が見つかり、中世の葬送の方法を知ることができ、貴重な発見とされています。

最後に、蛇足ながら、不動寺のボダイジュの実を拾い、実際に数珠を作ってみました。なかなか素朴で味わい深い仕上がりに思いますが、いかがでしょうか。

文/写真 文化財課



※木棺(もっかん)=木のひつぎ

※ふくいく=よい香りがただよっているさま